

アーティスト・トーク 宮本隆司 2007年8月24日収録

建築というのは
いろいろな場面があるんだと
ものが立ち上がっていくプロセス
それと反対に壊されていく
過程も興味深い
写真というのは紙の上の廃墟である
紙の上に廃墟のような像が
あるんじゃないかと
解体中の現場を見ると
何かすべてがあからさまになっている
ものの本質が見える
というような気がするんですね

宮本さんは1970年代の半ばから
フリーランスの写真家として
活動を始められたという。

で、一躍注目を集めるシリーズとして
「建築の黙示録」という作品があります。
私は70年代の半ばぐらいからですね、
建築雑誌の編集部に出入りしていて、
僕はもともと美術大学でグラフィックデザインを
勉強したんですけれども
現代アート、あるいは写真も好きで、
自分なりにいろんなことをやっていたんですね。
で、いろいろな現場をスナップで撮っていたりということで
編集者よりも写真の方が向いているというか
本当は自分は写真をやりたいんじゃないかということで、
そのとき、たまたま中野刑務所という
解体現場に出会ったわけです。

アサヒグラフという雑誌がありまして、
その取材で入ったのがきっかけなんですね。
こういう赤レンガのすごい建築を壊してしまうのは、

なんともったいないということで、
ずっと通ったんですね。
で、これを撮っている間に
はっと気がついたんですね。
そういえば、東京に大きないろんな建築を
あちこちで壊している、
ですから、こういうところに潜り込んで
それで撮影していたわけです。
で、ちょうどその頃が80年代のバブルの頃で、
都市の再開発の真っ盛りだったわけですね。
昭和初期に建てられた
コンクリートの建築は、ちょっと時代遅れになって
高層ビルに替えようという時期だったんですね。
建築雑誌って、基本的に出来上がって完成した
写真しか載せないんですね。
言ってみれば、
お見合い写真みたいなものですね。
一番きれいな状態をお見せするという写真が
主なわけです。
ところが、建築の、
たまたま中野刑務所の解体現場を見たときに
建築というのはいろんな場面があるんだと
建設中の現場というのもこれも面白いですね。
ものが立ち上がっていくプロセス、
ちょうどそれと反対に壊されていく過程も、
これも非常に面白いというか興味深い。
で、完成された、
あるいは、使われている状況だけが
建築ではないんじゃないかということで、
そこに気がついたわけです。
で、これはつくばの科学博覧会の
パビリオンの解体の映像ですけれども、

このときは博覧会の会期中は
行かずにですね、
解体が始まるのを待って

撮影した写真です。
もっとも、こういう写真を撮る
物好きな写真家は全くいなくて、
写真家は僕一人でした。
これは仮設の建物で
いずれ壊されるという想定のもとに作ったものなので、
軽いというか、意味が全く付着しないというかね
そういう感じはしましたね。
建物だけではなく、その背景というか
地になっている
もうちょっと広いものということが、
この一連のお仕事には
バックグラウンドとして
やっぱりあるのではないだろうか。
解体現場というのは
街中でほとんど見ることはできませんね。
塀なんかで囲われてですね
見えなくなってますね。
で、知らないうちに消えちゃう。
人の生と死が見えないというようなことと同じように
建築のですね
生き死にが全然見えないという
そういうことでもあると思うんですね。
その解体現場の中に内側に入ると
隠されているものが見えると。
特に東京は全てがこう経済効率のもとに
あらゆる場所が効率よく使われてますから
廃墟のような
ほったらかしの空間というのは無駄なわけですね。
だから、できるだけそういうのは
短時間のうちになくすということが
特に日本の大都市の
ありようだと思うんですね。

特に東京はそうだと思うんです。
だからなかなか見えない。

だからそういう無意識の部分も
気がつかないということだと思っ
香港のスラム街がいずれ近いうち
取材に行かれたのがこの・・・

これもね、
無意識なわけですね。
中国人のそれこそ
集合的無意識の塊のようなもの
これは香港の巨大スラムです
これに2.8ヘクタールぐらいの
4万人ぐらいの人が住んでいて、
10階建てから15階建てぐらい
密集しているわけです。
九龍城砦っていうのは
無法地帯というか、イギリス
警察が入れないという
そういう特殊な場所だった
で、難民やその他いろんな人
街にしちゃったわけです。
これは通路なんですけども、
排水のパイプとかあと電線とか
内臓のようにむき出しになっ
ずっと天井を這っているん
で、この道もくねくねずーっ
本当に迷宮迷路ですね。
ただ、ここはいろんな意味で
すごく面白いところで、
こういう細い道でも
ちゃんと街路の名前がついて
小さいけれども都市なんです
で、巨大スラムといっても、

子供もお年寄りも住んでいて、
ごくごく普通の人が大半です
で、それがいよいよ

複雑なプロセスを経て
解体されるころまでを
見届けられるわけですが。
今、スラムのコンクリートの塊は
全部撤去されて、
今はきれいな中国式の庭園になっています。
これ、そのまま残しておけば
多分間違いなく
負の世界遺産だと思います。
僕はいつも言っているんですけど、
これは、間違いなく世界遺産だと。
もったいない話だと。
今でも残念だと思っています。
これは有名なベルリン大劇場という
ハンス・ペルツィヒという人が設計した
有名建築だったんですけど。
ベルリンに最初に行った時、
85年ですから、まだ壁があった頃です、
東側にあった
建物で偶然に撮影した写真です。
ドイツ表現派と言ってですね、
建築の歴史の教科書に必ず出てくる
名建築です。
それを壊しちゃったんですね。
本当にもったいないことで、
今この同じ場所に劇場はありますけれども、
どうしようもない建築が今建ってますね。
これが最近の写真です。
これも旧東側です。
プロシア帝国の王宮があった場所で、
第2次大戦で爆撃を受けてですね、
ほとんど廃墟になっていたわけです。

で、東ドイツ政府がモダンなですね、
国会議事堂と劇場を合わせたような
巨大建築を作ったんですね。

それが東西統一された後ですね、
廃墟になっちゃったわけです。
去年から解体が始まって、
まだ壊しているんじゃないんですかね。
これはかなり重くてですね。
これをいっぺんに壊しちゃうと、
隣にある教会が何か浮いちゃうっていうんですね。
その地盤が悪くて、
なり重たい建築なんでね、
いっぺんに取り払うと周りに影響が出るということで、
少しずつ壊しているみたいです。
で、2004年に僕は、
壊される寸前ですけども、
こういう中からですね
ガラス越しに、かなり汚れているガラスですけども
ベルリンの本当に中心ですから、
周りにいろいろな隣の教会と、
それから、向こうに美術館が見えますけれども、
そういう風なものが遠くに見える
この汚れたガラス越しに見えるというのを
いろいろ撮りました。
ピンホールのシリーズ、これはわりと最近の発表だと思
うんですけども。
これは、去年から今年にかけて
瀬戸内海の直島というところで
展示したものです。
実は箱を展開したのなんです。
これをこう内側へ折りたためば
箱になりますね。
箱の内側に印画紙を張って
中心のところにピンホールを針穴を開けて
そうすると、そこから外の世界が箱の内側に映り込むと。
で、この下の方にですね
黒い変なものが見えますが、
これです。
これは私のシルエット。

横に寝てるんです。
これは要するに箱の中に私は閉じこもって
印画紙を張る役目なんです。
撮影中はこうやって縮こまって寝てるわけです。
それがシルエットとして写っちゃってるという
そういう作品です。
アルミにあけた1ミリの穴で
外の風景がこういう風に写るんですね。
これは全部景色が逆さまに写った
その逆さまの形で展示もされているという。
逆さまで、しかも裏返しなんです。ね。
これはあれなんです、人間の目の中も
同じように映っているはずなんです。
外の映像がこの眼球の網膜に
逆さまで裏返しに映っている。
投影されているはずなんです。
それを人間の場合は脳で
理解して補正しているわけです。
で、この私のピンホール写真の場合は、
そのまま展示しているということです。

いよいよ「神戸1995」という
シリーズについて
話を進めていきたいと思うんですけれども。

私、この神戸の写真を撮ったのは
震災後1週間ぐらい経ってからです。
起きた時、もちろんテレビで見ました。
で、これは大変だということで、
とにかく現場を見るだけでも、と思って、
1週間後に僕一人で
大阪から船に乗って、その日は日帰りでした。
で、僕はいつも使っている4x5のカメラを
一人で担いで
三宮の周辺をうろうろして
で、これはもうちゃんとしっかりフィルムをたくさん持って

準備をしていかなきゃいけないということで、
4週間後にもう一回、今度は車で行きました。
あとは1週間ぐらい歩いて、あるいは自転車で
一人ぽつぽつと行って撮ったというのが
この神戸の写真です。
報道の写真家達、カメラマンは
ヘリで入ったり、それこそ壊れ方の激しいところを
どんどん報道していたはずで
ですから、私が撮ったこの神戸のこういう光景は、
私が歩ける範囲で歩いて、
ごく普通に見られる光景を撮っただけなんです。
ですから、今見るとものすごい光景に見えますけれども、
その当時その通路を歩いて行けば見える光景だったんですね。
で、ヴェネツィアで建築展というのがあるんですね。
コミッショナーは建築家の磯崎新ですね。
その前年に日本で大きな地震があったということで、
これをテーマにしようというふうに、
磯崎さんは考えたんですね。
で指名されたのは、私と
それから建築家があと二人、
石山修武（いしやまおさむ）とそれからもう一人、
宮本佳明（みやみもとかつあき）さんが。
彼自身も尼崎で震災の被害に遭って
家が全壊したという。
神戸から実際に瓦礫を30トン近く
コンテナで運んできて、
それでここに積み上げたんですね。
それと私の写真を大きく伸ばして、
高さ5メートルぐらいあります。
のべの長さで言うと、100メートル近くあるんですけども、
壁を埋め尽くしたんです。
決して震災の再現ということではありません。
ただ、ここであえてやったものです。

「震災の亀裂」と題されたこの日本館の展示は、
最高賞金獅子賞を得たと。

ただね、賛成反対が真っ二つになって
かなり大変だったみたいです。
まず、反対派はですね、
この建築展であるにもかかわらず、
何にも建築してないと言うわけです。
何も作ってないと言うわけです。
要するに、壊れたものをただ並べただけだ、と。
一方、これは良いという人は21世紀前夜の
人類の苦悩を表現したと言うのが受賞の理由です。
これまで時代の流れの中で、
人間がある意思を持って解体をする。
その現場を宮本さんがそこに立ち会って作品として
イメージを捉えてきた。
ところが、この神戸の震災というのは
巨大なその廃墟が圧倒的なスケールを持って
現実に出現してしまった。
私が今まで発表した
写真作品では、
こういう事件というようなものは他にありません。
廃墟のようなものといっても、
別に大事件が起きたり、戦争が起きている場面を
撮ったわけではありません。
唯一、この神戸の写真が事件、その現場を撮った作品です。
やっぱり何かちょっと後ろめたい感じがあります。
表現だなんてとても言えないというような
感覚はいつもあります。
一体何なのかな、と、その時から
ずっと今でも考えているんです。

これは僕なりに一言で考えて言うとですね、
死、要するに、死者がはっきりある、いるからですね。
7000人近い方々が亡くなってる訳ですね。
要するに、
はっきりとこの廃墟、あるいは
この瓦礫の後ろには

死者がいるわけです。
死というのはいくら言葉を発しても
虚しいというか、はっきり言葉で語れない
ということがありますね。
それから、生き物が熱をなくし、
しかも、動かなくなって
物質になっていくんですね。
しかも、最後は硬い骨になっちゃうわけですね。
というそういうはっきりとした死を前にするとですね
非常に後ろめたくなって
なかなか作品だなんて言えない。
ということが、
いつもこの神戸のこの写真の背後にあって
言葉を発し、語りによくさせている
元のところではないかな
という風に思っているんです。

解体される建築って大体、
年月が経って、色々な人の思いが入ってる
建築が多いですね。
ある目的のために建築って作られるわけです。
で、解体される時っていうのは、
そういうのが全部なくなっちゃうわけですね。
石とか木材とかという
そういう物質だけになっちゃうわけです。
何か全てがあからさまになっている、と。
要するに、裸の現実の生の姿が見える、と。
あるいは、ものの
本質が見えると、一旦世界がチャラになったという
気がするわけです。
そうすると、あらゆる意味、
人間が計画し、作り上げた意味が
判断停止というか、全部まっさらになっちゃうわけです。
そういうものが全部チャラになるということが
具体的に見えるというのが、
私にとっては非常に大きくありますね。

で、目的も意味もなくなった場所、空間というのは
少なくなりましたね。
要するに、原っぱとか
何もないほったらかしの場所ってというのが少なくなりましたね。
それは場所だけじゃなくて、
意識の中でもそうじゃないでしょうか。
これは朝から晩までテレビ漬けの毎日、
インターネット漬け
携帯電話漬けの毎日から、そういう風に
目的の意味もない空間時間というのが、
今の私達には随分減っているような気がするんですね。
で、こういう解体の場所には
そういうものがあるという気がします。

※テロップで表示される所蔵先は、収録当時のものです。当館所蔵品以外の作品に関しては、現在は所蔵
先が異なる場合がございます。